



合成師

G O U S E I S H I

最強スキルに覚醒したおっさん、第二の人生を気ままに生きる

著 盾乃あに

絵 このいけ



★ 登場人物紹介 ★

マー坊

星3ランクの探索者パーティを率いる前衛。ツネと同じく、ルカとは長い付き合い。



ツネ

高級武器店「^{ドール}tortie」の副店長。
ルカとは古くからの友人。

ナツメ

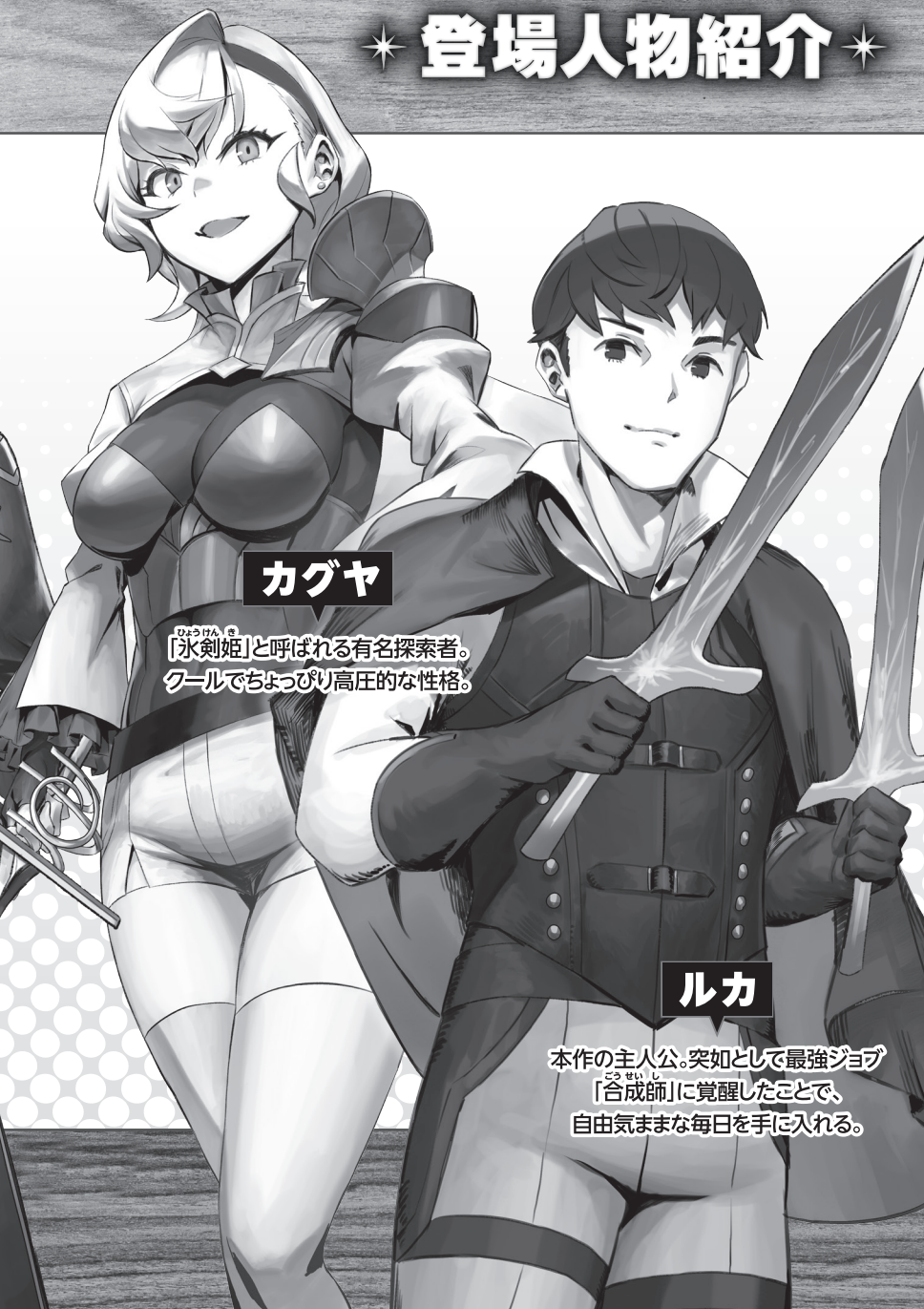
気弱な学生探索者。
とある事情で
パーティメンバーを探している。

カグヤ

「^{ひょうけん}氷剣姫」と呼ばれる有名探索者。
クールでちょっぴり高圧的な性格。

ルカ

本作の主人公。突如として最強ジョブ
「^{ごうせいし}合成師」に覚醒したことで、
自由気ままな毎日を手に入れる。



第一章 覚醒

「えーっと今って何年だ？」

俺はスマホで検索しながら、久しぶりに書く履歴書を埋めていく。

履歴書を書く理由は単純、リストラされたので、就職活動をしなければならないからだ。

一応四ヶ月くらいは失業手当がもらえるが、そんなの当てにしていられない。

さっさと次の仕事を探して就職しなければ生きていけないな。

「……はあ、書き終えたな」

そう呟き、手もとの缶ビールを開ける。だが飲む前に、せっかく書いた履歴書を汚れないようにファイルに入れておく。

俺の名前は——里見瑠夏だ。

今年で三十三歳になる中年で、これまではそれなりに頑張って仕事をしてきた。しかしつい先日、人員整理という名の人件費削減で解雇。職を失った。

ワンルームのアパートに住んでいて、車なし、彼女なし、たまにパチンコに行くくらいの平凡な男だ。

俺は電子タバコの本体にタバコを刺してボタンを押す。

「ふうー、これもいつまで吸えるかな？」

タバコもどんどん高くなっているので節約しないといけないが、やめられないのだ。

「ダンジョンに潜ればなあ……」

思わずそうぼやいた。

およそ百年前、世の中にはダンジョンというものが唐突に出現した。

最初は人々も驚いたようだが、調査によって、ダンジョンにはいわゆるファンタジー世界にいるようなモンスターが住んでおり、さらに貴重なアイテムも眠っていることが分かった。

そしてそれと同時に、世界中の一部の人が『覚醒』という現象に見舞われることになった。

覚醒した人間にはいくつか特徴がある。

まずは超常的な現象を起こす力、『スキル』に目覚めるのだ。さらに覚醒した者は身体能力も大きく上がり、『レベル』という概念を持つことになる。

なんでも、ダンジョンでモンスターを倒したり、スキルを使ったりすることでレベルが上がって、自身の能力が上がるらしい。その数値は『ステータス』として表示されるんだとか。

こうして、覚醒した者は『探索者』となり、スキルを武器にダンジョンに潜るようになった。

しかし、俺は覚醒出来なかった一般人。

覚醒する理由や条件はよく分かっていない。ただ二十歳くらいまでにするのがほとんどうらしい。

覚醒者がとても珍しいというわけではないが、一生覚醒しないまま死んでいく者もザラだ。

ちなみに、ダンジョンが出来た後に、国はそれらを管理するギルドという組織を作った。

ギルドは地域ごとに支部がある。ダンジョンはギルドによって整備され、モンスターがダンジョンの外に出ることはない。覚醒していない一般人に、モンスターは危険すぎるからだ。

実力のある有名探索者は、地位や名誉を持つだけでなく、大金を簡単に稼ぎ出す。

俺みたいな一般人には夢のまた夢だがな。

親は少し前に亡くなった。借金があったようで相続放棄した。

俺は天涯孤独、このままじゃ結婚も出来ないな。

無職の俺は、もう酒に逃げるしかなかった。

「あんだ？ もうないのか」

ビールがなくなってしまったのでコンビニまで買いに歩いていく。

酔っ払った俺は、冷たく気持ちいい風に当たりながらコンビニに辿り着く。

「いらつしやいませ」

店員の男を無視して、雑誌コーナーにある探索者の活躍が書かれた雑誌をカグに入れた。

ビールも六本買って、外に出る。

帰り道で廃工場の前を通ろうとすると、子供くらいの大きさの影が俺の前に立ち塞がる。

「あ？」

酔っ払っていたせいか、認識するのが遅れた瞬間、ドン、と腹に痛みを感じる。体当たりされたことが分かった瞬間、胃液がこみ上げてきた。

「ウツ！ オエエエエエ」

『ギャツギャツ』

こいつは……ゴブリン？

緑色の肌で小柄、腰裳こしみのだけつけたモンスターだ。

探索者からしたら雑魚らしいのだが、一般人の俺からしたら生命の危機だ。

ヤバい!? なぜモンスターがダンジョンの外に!? 逃げる!?

そうやって焦る前に、酔っ払った俺は、理不尽な暴力にキレてしまった。

ビールの入った袋を片手で回して、上段から振り下ろす。

「う……おおらあ!!」

『グギャ!』

頭に命中するとゴブリンはそのまま潰れたような鳴き声を出して消えていく。

俺は口の中に残った胃液を吐いて叫ぶ。

「つたく、ビールが潰れただろうが!」

そう思い、袋の中を確認すると破裂したビールが三本あった。

それと同時に、俺は自分がしたことを理解する。

「ん? ……お、俺がモンスターを倒した?」

腹に残る痛みと、目の前の吐瀉物としゃぶつ。ゴブリンがいた場所にはモンスターがドロップする黒っぽい

ビー玉のような物——魔石ませきがある。

ポタポタと破けたビニール袋からビールの漏れる音が響く。

俺はふと呟いていた。

「ス……ステータス」

里見瑠夏 《サトミルカ》 32歳

レベル1 ジョブ 合成師ごうせいし (NEW)

スキル 合成ごうせい (NEW)

ユニーク 追加効果ついかこうか (NEW)

「俺……覚醒してるな」

覚醒とはいっつき起こるか分からない。だが、まさかこの年で覚醒するとは。

一撃でゴブリンが死んだのも、覚醒していたからってことか?

状況がよく分からない。

俺は現実感がないまま、とりあえず魔石を拾い、家に帰ることにした。

家に帰った俺は、ビールの入った袋をキッチンの流しに置く。そして近くの椅子に座った。

色々気になる点はあるが、ひとまずこの『合成師』というのがなんなのかをスマホで検索する。

「……ないな、俺だけのジョブのようだな」

『ジョブ』は覚醒した者の職業のようなものだ。主にスキルによって決定するらしい。

覚醒者のジョブはギルドで記録されており、どんなジョブがあるかのデータは公開されている。

しかし、かなり稀だが、新規のジョブが見つかることもあるらしい。

「……俺のはレアなジョブなのか……」

スマホを置いて、改めて椅子に深く座る。

「ふう」

モンスターが倒せたのは良いが、合成師という字面からも分かるように、多分生産系のジョブなんだろうな。

そう考えると、少し冷静になってきた。

ジョブの中でも、何かを作り出すようなジョブは生産職せいさんしやくと呼ばれ、立ち位置はあまり良くないと聞いたことがある。

どうせなら剣士や魔法使いなどダンジョンで活躍できるジョブが良かったな。

そうすればダンジョンでレベルを上げ、モンスターの素材を持ち帰り大金持ちになることもできたのに。

だが、覚醒は覚醒だ。明日はギルドに登録しに行かないといけないな。

覚醒するとギルドに登録する義務がある。これはどの国でも絶対とされていて、面倒な審査が待っているのだ。

「ああ、明日はハローワークに行こうと思ってたんだがな」

俺は立ち上がるとキッチンに置いたビールのうち、無事なものを水で綺麗に洗う。

そして水気を拭いて二本を冷蔵庫に、一本を持ってゆつくり開ける。

「ああ、美味しい、が……明日かあ」

こんな中年が明日、覚醒しましたとギルドに登録しにいかないといけないなんてな。

「はあ、マジか……」

と言いつつも、恥ずかしながら、内心覚醒したことにワクワクしている自分がいた。

◇ ◇ ◇

翌朝。肌寒いので上着を着て、近くの足立区ギルドに歩いて向かう。

車なんて持っていないし、買う金なんかない。

そのまま歩き、商店街を突っ切った先の大きなビルに入る。入り口には足立区ギルドと文字が彫^ほつてある。

朝だからか人は少ない。タッチパネルで待ち札を取ると、すぐに呼ばれた。

「はい、今日はどういったご用件でしょうか？」

明るそうな女の子が喋りかけてくる。ネームプレートには『児玉^{こだま}』と書いてあった。

「あの、昨日……」

昨日ゴプリンが外にいたことと、俺が覚醒したことを話す。

「そうでしたか、分かりました。これは上に報告しますので、少々お待ち下さい」

児玉さんは少し席を離れた。しかし、数分で戻ってくる。

「お待たせしました。ゴプリンが外に出ていた件は担当の者が対応します」

「ありがとうございます」

「もう一つの件ですが、覚醒したんですね？ おめでとうございます。ではこちらの用紙を記入していただけますか？」

「はい」

意外なことに、児玉さんは俺の覚醒に驚かなかった。俺が知らないだけで、この年代の覚醒も割とあるのだろうか。

そう思いつつ、名前やスキルなど、用紙に書かれた項目を埋めていき、児玉さんに渡した。

記入した用紙をパソコンに読み込ませ、内容を確認している児玉さん。

「合成師？ というのはデータベースに載っていない職業になりますので、あちらのジョブ管理課にご案内しますね」

「はい」

少し離れた場所に行くと、ゴツい男性が立っていた。

「それでは、あとはこちらの御門^{みかど}がご案内します」

「御門と申します。よろしくお願いしますね」

見た目に反して丁寧^{ていねい}な口調で話す御門さんについていく。

エレベーターに乗り、八階まで上がると、そこはスポーツジムのようになっていた。

「それではこちらで、まずは覚醒者の基礎体力を確認していきますね」

「は、はい……」

言われるがまま、スポーツテストのようなことをやっていく。

まさかこんなことをするとは思っていなかったが、動きやすい服装をしていて良かった。そのままテストを終えると、御門さんは言う。

「なるほど、覚醒者としては平均的な数値ですね。最後にこれに触っていただけますか？」

「はあ、はあ、ふうー、は、はい」

息を整えて、意味も分からないまま差し出された水晶すいしやうに触る。

御門さんはその後、パソコンに何かを打ち込んでいく。

「ありがとうございます。では、最後にもう少しだけお時間を下さい」

「はい」

「それでは、貴方あなたの合成師というジョブですが、身体能力から考えると、生産職のようです。これまでスキルを使ったことは？」

「ないです。昨日の夜に覚醒したばかりですので」

「では、ここにある『鉄てつのインゴット』に対して、スキルを使ってみましょう」

小さな鉄のインゴットが二つ置かれたので、とりあえず両方を手に取って呟く。

「……『合成』」

すると、二つのインゴットが光った。初めてだが、これがスキルを使うということのようだ。

そのまま、二つのインゴットが消え、一つのインゴットが出来上がった。

「それでは調べますね。『鑑定』」

『鑑定』は物の価値が分かるメジャーなスキルだ。どうやら御門さんも覚醒しているらしい。

すると彼は目を丸くした。

「はい、スキルを確認出来ました。二つあった鉄のインゴットがなくなり『鋼鉄こうてつのインゴット』に変わっていました。重量は二つの石の合計ではなく、一つ分になっていますが、『力+3』が付与



されています」

付与とは、主にスキルの効果などで武器や防具をパワーアップすることだったはず。

具体的な価値は知らないが、『力＋3』という、持っているだけで力が上がるということだろうか。だが、あまり大きい数字とは思えないな。

「はい、それだけですか？」

俺が何気なく言うと、御門さんは大きな声で言う。

「いや、これは凄いことですよ！　まず、鉄のインゴットが鋼鉄になっていた。つまり素材が変わったんです。さらに付与は貴重ですからね。しかも『力＋3』！　これはかなりレアです」

「そうなんですか？」

「そうですよ、この素材を加工して剣を作ると『力＋3』の鋼鉄の剣になるんですから」

「はあ、そうなんですね」

数値だけを言われても、やはりピンと来ない。

「はい！　それでは合成師としてのスキル確認も終わりましたので一階に戻りましょう！　こちらのインゴットは貴方のスキルで強化されたので、元の素材の値段を引いた後、本来の値段で買い取らせていただきますね」

「は、はい」

一階に戻り、番号札をもらって呼ばれるまで椅子に座ってスマホをいじる。

その間、先程御門さんが言っていた『鋼鉄の剣（力＋3）』を検索する。

「な！」

思わず声が出た。

通常の鋼鉄の剣は一〇〇万円で、鋼鉄の剣『力＋3』は二八〇万円で売られていた。

凄いな、『力＋3』だけで一八〇万円もプラスになるのか。御門さんが驚くのも分かる。

そう思っていると、自分の番号が呼ばれて受付に向かった。

「はい、里見様のギルドカードが出来上がりましたのでお渡しします」

児玉さんがくれたのはキャッシュカードのような物で、裏面には名前が載っている。

「こちらは星1のギルドカードになります。ダンジョンで活躍すると星2、星3と上がっていきます。安全のため、そのランクに合ったダンジョンしか行けないので注意して下さい」

「えっ……生産職の私もダンジョンに行けるんですか？」

「はい、生産職の方も沢山いらっしゃいますが、材料などを採取しにダンジョンに行かれる方もいらっしゃいますよ。もちろん普通に戦ってレベルを上げる方もいますね」

「はあ、そうなんですね」

それは知らなかった。実際に覚醒してみないと分からないこともあるということだな。

「合成師というジョブのデータはありませんが、身体能力は平均程度はありますので、星1ダンジョンに出てくるモンスターなら大丈夫だと思いますよ」

そうなんだな。生産職で少し落ち込んでいたが、なんとか探索者になれそうだ。

「それと先ほどの『力+3』のインゴットなのですが、ほんの数グラム程度の小さな物ですので、五万円で引き取らせてもらってもよろしいでしょうか？」

「あ、そうですか、はい！ いいです」

「ありがとうございます。ではギルドカードの方に入金いたしますね。各種施設の支払いや、探索者同士の金銭のやり取りも、このカードで行えますので」

それは便利だ。しかも、あんな小さなインゴットでも五万円か。金になるんだな！

「では最後に、探索者の規則や足立区ギルドが管理しているダンジョンを^{まと}纏めた冊子をお渡しします。こちら、目を通しておいってください」

「はい」

「これで以上となりますが、なにかありますでしょうか？」

「いえ、大丈夫です」

「それではこれで終わりとなります。ありがとうございました」

「はい、ありがとうございます」

俺はそう言って、受付を後にした。だが直後、ハッとあることを思い出す。

「たしか、二階にギルドの武器防具販売店があるんだよな」

俺はエレベーターに乗って二階に上がる。

ドアが開くと、目の前にいきなり武器や防具がズラリと並んだ。

俺はワクワクしつつ、店内を見て回る……が、やはりどれも高いなあ。

鉄の剣で三〇万円、^{かわまち}革鎧で五〇万円か。これは初心者セットを買った方が得だな。

俺はそう思い、カウンターで初心者セットを注文する。

「初心者セットだね。じゃあ革鎧を調整するから、ちょっと待ってくれよ」

店員はそう言って、革鎧を持つてくる。

「これを見てみて、きつかったら少しなら調整できるから」

「は、はい」

上着を脱いで革鎧を着る。

「まあ、腕なんかを動かしてみてくれ」

「はい、まあこんなもんですかね？」

「そうだな、少し調整すれば良いな」

店員に調整してもらうため、革鎧を脱いで上着を着る。

初心者セットは片手剣（武器は選択可）、革鎧、^こ剣帯、^こ小盾、^{ひたい}額当て、^と片手剣用ケース、^と砥石が
付いて税込八〇万円だ。

ギルドカードじゃない普通のクレジットカードで支払う。袋を受け取ってギルドから外に出た。
「ふう、買ってしまったな。来月の引き落としが怖いなあ」

さて、初心者装備を買ってしまったので行くしかない。

足立区にあるダンジョンは二箇所、初心者ダンジョンと呼ばれる星1のダンジョンと、それより難度が高い星3のダンジョン。

もちろん行くのは初心者ダンジョンで、歩いて向かうと、箱型の建物が見えてくる。

ダンジョンはそこを管理するギルドの派出所の中にある。そこでダンジョンの入場管理やダンジョンから出た素材などの買取を行っているのだ。

あとたまに覚醒していないバカが入ろうとするので、それを取り締まることもしているらしい。

「ふう、少し遠かったな」

ギルドから距離があつたが、ここでもようやく探索者になった実感が湧いてくる。

俺も覚醒したのだ。職をなくした俺が探索者としてやっていけるか、ジャッジしなれない。

八〇万もかけているのだから、そりゃなんとかしないといけない。

「よし」

中に入るとそれなりに人がいて、職員も普通に仕事をしているので、そんなに緊張することもなく更衣室に入る。

そのまま先ほど買った装備に着替えると更衣室から、外に出た。

受付でカードを見せると、ダンジョンの前に案内された。

入り口はモヤモヤとしていて先が見通せない。

「ふう」

後ろに人はいないので自分のタイミングで足を踏み入れると、突如として視界が歪む。

これがダンジョンで起きるという転移だろ。

気が付くと、草原に空、太陽と、風に揺れる木々などが見える場所に立っていた。

どうやら、フィールド型と呼ばれるダンジョンのようだ。どこかに下に続く階段があるはず。

とりあえず歩いてみる。

ロントの上に革鎧を着ているが、暑くもなく寒くもないちょうど良い気温だ。

するとダダダと走る音が聞こえたので剣を抜いて構える。

『ギャギャ』

ゴブリンが二匹走ってくる。

一匹は棍棒こんぼうを持っているのでそちらに剣を向け振り下ろす。命中してゴブリンがすぐに倒れたので、横に剣を振り二匹目のゴブリンの腹を切り裂く。

「はあ、はあ、はあ」

倒れたゴブリンにトドメを刺すと、二匹ともビー玉のような魔石を落として消えてしまう。

「ふう、なんとかなるもんだ」

魔石を拾ってバッグに入れるとまた歩き出す。

モンスターはなぜか倒すと消えてドロップ品を落とす。なぜそうなのかは偉い学者えらいさんが調べて

いるが分からないようだ。

剣なんて持ったことはないが、バトル漫画の見様見真似で剣を振り、ゴブリンを倒していく。

「はあ、はあ、ゴブリンばかりだな」

ゴブリンのような人型のモンスターを倒すと不快感があるかと思っただ、そうでもない。

モンスターは倒すと消えてしまうから、ゲームのような感覚が強いのかもしれない。

休憩を挟みながらゆつくりとダンジョンの一階層を進んでいった。

そして夕方になるまでダンジョンにいたが、さすがに疲れたので外に出ることにした。

ダンジョンは各階層に出口があり、そこに入れば外に出ることが出来る。まあ、俺は一階層から出ていないが。

それでもゴブリンを百匹ほど倒したので、魔石も百個ほどある。

魔石は石油なんかと同じようにエネルギーにすることが出来る。そのおかげでギルドに買い取ってもらえるのだが、ゴブリンの魔石は価値がかなり低い。一個二〇〇円。つまり二万ちよいだ。

やはり日給二万になると、会社で働いていた時と比べれば金になるな。

とりあえず初心者セットの元を取るまではダンジョンに通い詰めだな。

◇ ◇ ◇

次の日はダンジョンの前にハローワークに行った。覚醒したので探索者になると伝え、就職と同じ扱いになると言われた。これで社会的にも無職じゃなくなっただけである。

しかも、早期に就職したということで再就職手当が出るそうだ。

ラッキーだなと笑いながら、それから一週間ダンジョンに通い詰めレベル上げを行う。

その結果――

里見瑠夏《サトミルカ》 32歳

レベル16 ジョブ 合成師

スキル 合成 鑑定 (NEW)

ユニーク 追加効果

そう、新しいスキルが手に入ったのだ。

覚醒者のスキルはレベルが10上がるごとに増えるらしい。しかも『鑑定』という人気スキルだ。そしてレベルも二階層に進む目安のレベル10を超えている。

なのでその後は二階層に進んでみることにした。階段のある場所は分かっている。

「オラァ！」

『ゲギャツ』

ゴブリンなんかは余裕で倒して、二階層に入る。

さらに二階層から出てくる武器持ちゴブリンも余裕で倒していく。

すると武器持ちゴブリンからはたまに錆びた武器をドロップすることが分かった。

ということで、折角なら『錆びた片手剣』と『錆びたダガー』を合成する。

すると、『鉄のダガー（素早さ+3）』が出来た。

これまでに色々試して分かったことだが、俺の合成は、同じ種類の素材を組み合わせると、上位の素材を作ってくれるようだ。逆に、素材の違うものは合成できない。

今回は、錆びた武器を二つ組み合わせ、『鉄』の武器が出来た。

この『鉄』を組み合わせると、『鋼鉄』の武器になる。さらにギルドの時のように、付与がつくこともあるが、この付与はどうやら『ユニーク 追加効果』によるものらしい。

まあ、このユニークがなんなのかは、俺もハッキリ分かっていないんだけどな。

こうして、合成を繰り返した結果、俺の剣は『ミスリルの片手剣（力+15、素早さ+12、防御+

3、知能+3、幸運+9）』となった。

合成素材の流れとしては、錆↓鉄↓鋼鉄↓ダマスカス↓ミスリルという順番だった。

元々鉄の片手剣を持っていたから、使った錆びた片手剣は合計で十四本だ。

付与の効果も加わって、とても軽くて強い片手剣になった。

「よし、三階層に行こう」

三階層に入るとオークが出てくるが、ミスリルソードで一撃だ。ドロップ品はオーク肉と魔石、たまに鉄製品がドロップする。

オーク肉はキロ一万で買い取ってくれるのでバッグに詰められるだけ詰めた。

そして、ある程度三階層で戦った所で、もう遅いので帰ることにする。

そのまま、ギルドで素材を買い取ってもらった。

「オーク肉が一五キロで一五万円、オークの魔石一五個で四五〇〇円、ゴブリンの魔石が一二五個で二万五〇〇〇円で、合計一七万九五〇〇円になります」

「はい、カードをお願いします」

そのままギルドカードに入金してもらった。

これまでは使う機会がなくて知らなかったが、今の時代、ギルドカードを使用できない店の方が少ないくらいだった。

あとは紐で結んで持って帰ってきた鉄製品、錆びた製品をバッグに入れて持ち帰る。

自転車を買ったので行き帰りは楽になった。

「ハハッ、これだけで儲かるんだから探索者はやめられないな」

と独り言を言いながらコンビニに寄って帰る。

コンビニで欲しい物を値段も見ずに買う。

「あー、贅沢な気分だな」

中古車と賃貸物件の雑誌、それとビールにツマミを大量に買っていく。

そのまま、ワンルームのアパートに帰ると、部屋の奥で武器が並んでいるのが目に入った。

そう、自分の武器を並べるために、わざわざ武器立てを買ったのだ。

俺は部屋に入り、今日の戦利品を確認する。

「よし、またミスリル武器が合成できるな！」

今日の分で、またミスリル製を作るだけの素材が集まった。だが、これは使う予定はない。

これまで試して分かったのだが、今の俺のレベルでは、ミスリル以上の素材を合成できないのだ。

だから、今回作った武器は売る予定である。

片手にビールを持ちながらスマホを操作してミスリルソードの値段を見ると一五〇〇万円もしている。

しかもそれが、今日出来た分を合わせれば三本もあるのだから、笑うしかないだろ。

「あはは、これは引越し……いや、まずは車だな」

夢は広がる。さて、どこに売りに行こうかな？

ギルドはダメだな。どうせ安物しか置いてない。

近場の高級ブランド店に売るのもめんどうだ。よし、ダチの勤めている店に売りに行こう。

第二章 友人

次の日、新宿まで、目的の店に到着する。

店の名前は『トードイtortie』だ。中に入ると、お姉さんが声をかけてきてくれる。

「いらつしやいませ」

「ツネ、じゃなくてさかきほら榊原さんはいる？」

「はい、今お呼びいたします」

その間に店の中を見る。ミスリルの片手剣はやはり一六〇〇万くらいするのだからすごいな。

すると、カツカツと音を立てて歩いてくる者がいた——目的の人物、さかきほらつねよし榊原恒吉だ。

髪を整えてスーツを着たツネ。久しぶりに会うが変わっていないな。

「いらつしやいませ、と、久しぶりだな、ルカ」

「ツネも元気そうだな」

「ああ、あつちで話そうか」
「おう」

奥のスペースに案内されたので、そのソファアに座る。

「で？ 何の用だ？」

「武器を売りに来た」

「へ？ お前が？ ……うちは高級ブランドだぞ？」

「だからだよ、俺も探索者になったからな」

「は？ お前覚醒したのか！」

「ハハッ、ビックリしただろ？ もっとビックリするぞ？ これを売りにきた」

そう言つて俺が武器を取り出すと、ツネは慌てて高級そうな布を机に広げる。

俺はその上に、ミスリルの片手剣、ダガー、片手斧かたておのを置いた。

「これ、全部ミスリルじゃねーか！ ……しかも付与がされてるな？」

「分かるのか？」

「一応、こここの副店長だからな」

そう言つてモノクルを取り出すツネ。

「この『鑑定かんていのモノクル』で、細かく鑑定するぞ？」

「どうぞ」

「な、なんだこれ！ ミスリルの片手剣に力＋15、素早さ＋15、防御＋3、知力＋6、幸運＋6が付与されてる!？」

「おい、大声出すなよ」

「し、失礼しました！」

ツネは周りに頭を下げ、椅子に座り直す。そしてモノクル片手に鑑定を続ける。

「ダガーも、片手斧も、同じくらいの付与がされている……う、売るのか？ これを？」

「ああ、いくらになる？」

「悪い、俺じゃ決められないから店長を呼んでくる」

「あいよ」

そのまま待つと、すぐにツネと一緒に店長さんが現れた。

「私はこのショップマネージャーの窪田敏夫くぼたとしおと申します」

名刺を差し出してくるので受け取り、頭を下げる。

「榊原の友人の里見瑠夏と申します。申し訳ないのですが、名刺はありません」

「はい、よろしく願います。なんでもミスリル製品を売りにこられたと聞いておりますが、製品を見せていただいてもよろしいですか？」

「どうぞ」

低姿勢の店長さんに許可を出すと、先ほどと同じく鑑定のモノクルで鑑定を始めた。

「……これは凄い……ウチに売るということは、この店の刻印^{てくいん}を刻んでもよろしいのでしょうか？」
「別に構いません」

武器をこういうブランド店に売ると、そのブランドの刻印^{ほくしん}が施される。
それでこのブランド公認の武器となるわけだ。

「ありがとうございます。それでは片手剣が三五〇〇万、ダガーが二〇〇〇万、片手斧は
一五〇〇万でいかがでしょうか？」

全部で七〇〇〇万か、これは凄いな。

「はい、それをお願いします」

「ありがとうございます！ お支払いは現金をご希望でしょうか？ それともギルドカードに？」

「カードに入れてください」

「はい！ ありがとうございます、カードをお預かりします」

店長さんはカードを受け取ると端末を操作し、お金が入った画面を見せてくれた。

さらに明細書を発行しながら、尋ねてくる。

「ちなみに、こちらの品はどうやって入手したのでしょうか？」

「あはは、それは秘密ですね。でも、悪いことはしていませんよ。また持ってきてても？」

「は、はい！ もちろんです！」

店長は喜んで、その三本の武器を大事そうにツネに渡す。

「今後ともよろしくお願いします」

「はい、よろしくお願いします」

そのまま俺が店の外に出るまで見送り、頭を下げている。

俺は道を歩きながら、思わず笑った。

「よしよし！ 夢の一億まであと少し！ たった一回で七〇〇〇万なんて……あはははは！」

こんなの笑いが止まらないだろ！

「よし！ これで車を買うか！」

そのまま目をつけていた中古車屋に行く。

目当ての車を紹介してもらうと、その場で契約してギルドカードで支払う。

一括で支払い、納車は三日後となった。

後は待つだけなので電車で乗り継ぎながら帰るのだが、家の最寄駅まで一時間ほどかかった。

「やっぱ車がいるよな」

そう呟きながら駅を出て、駐輪場に停めていた自転車で家に帰る。

タクシーで帰っても良かったが、元は貧乏人なので、変な所でケチってしまった。

家に帰ると軽くなったバッグを下ろして一息つく。

「ふう、これで車も手に入るし、ミスリルの武器を売る店も決まったな」

ビールを開けて飲みながらスマホで検索する。

さすがにスマホで見られるオークションサイトには、ミスリルの武器は出品されていないな。

「ふーん、オークションはやっぱ海外サイトがいいみたいだな」

色々検索すると、二〇〇〇万でミスリルソードを落札！などと書かれている記事を見つけた。オークションもそのうち視野に入れていかないとなあ。

「まあ、合成で作れるものはないにも武器だけじゃないしな！」

空のビール缶を流しに置いて冷蔵庫から新しくビールを取り出す。

「プハア、やっぱり人生、楽しんだもん勝ちだ」

俺はこの『合成』で楽しい人生を送るつもりだ。

◇ ◇ ◇

翌日、パチンコ中にスマホが鳴ったので、外で電話に出る。相手は昨日会ったツネだ。

『よお！ 今何してんだ？』

「ん？ パチンコ」

『は？ 金持ちなのにか？』

「ハハッ、暇つぶしだな。かかんなくてイライラしてたところだよ」

久しぶりにパチンコに来たがあまり面白くない。

『お前なら、もっと別のギャンブルができるだろ？』

「カジノとか？ そんなところ行ったこともないよ」

『庶民しよみんだな』

そう、庶民はギャンブルと言ったらパチンコか競馬あたりだよ。

「で？ 何の用だ？」

『お、そうだった、例の武器、ルカはまた持つてくるのか？』

「そうだなあ、気が向いたら？」

『んなこと言っていないで、パチンコするくらいなら稼げよ』

「まあ、そうだなあ」

『俺にもダチだからってことで紹介ボーナスが入るんだからさ』

「お前のためじゃねーかよ！」

『まあ』

ツネとは高校からの長い付き合いだ。

まあ、半年ほど連絡とってなかった間に、副店長まで出世しているとは驚いたがな。

『なあ、久しぶりに飲みにいこうか！』

「いいけど、マー坊も呼ぶか」

『だな、あいつ今何してんだ？』

「さあ？ 電話してみるわ」

『了解！ んじゃ後で場所はメールするわ』

「あいよ」

電話を切ると、マー坊——同級生の今井真斗に電話をしてみるが出ない。

折り返し電話があるまで、またパチンコを打ちに店に入っていく。

結局、すぐに飲まれたのでパチンコはやめてコンビニに寄った。ビールにツマミなどを買い込んで家に帰る。

すると、ツネからメールがきた。

やっぱり店はツネの職場がある新宿の居酒屋らしく、着替えて出かける。

どうせならこっちの近くにしてくれれば良いのに。と思いながら電車を乗り継ぎ新宿へ到着すると、スマホが鳴る。マー坊から折り返しがきたのだ。

「久しぶりだな」

『おう、久しぶり』

「今、何してんだ？」

『探索者だよ、俺、二十過ぎたけど覚醒したんだ。剣士だ』

「奇遇だな！ 俺も今、探索者だよ」

『まじか！』

マー坊とは一年以上連絡を取れてなかったけど、覚醒していたのか！

俺以外にも、ある程度年を取ってから覚醒している人がいるということか。

「今日、新宿の『居酒屋麦わら猫』ってところでツネと飲むんだけど、来られるか？」

『行く行く！ 何時からだ？』

「十八時に予約してあるらしいぞ」

『分かった！ 遅れるかもしれないけど行くわ』

「あいよ、待ってるわ」

そう言っただけで電話を切ると、店の地図をメールで送る。

今は十七時を少し回ったとこだ。

またパチンコ屋に入るのも時間の無駄なので、ブラブラと新宿の街を歩いて回る。

「ん？ こんなところにダンジョン専門の道具屋があったんだな」

そこは西口から少し離れた場所にポツンとあり、古びた看板には『ダンジョン専門・道具屋いぶき』と書いてある。

店に入ると少し臭うが、薬草などの臭いだろう。我慢できないほどではないな。

「いらっしやい！ 婆ちゃん、お客さんだよ」

元気な声で店員の女の子が呼ぶと、奥からお婆さんが出てくる。

「あら、いらっしやい、初めての顔だね」

「こんにちは、少し見させてもらうね」

「はいはい、いいですよ」

店の中を見るとポーションや薬草、スキルボールなんてのもあるな。スキルボールとは、使うだけでスキルを得られるアイテムだ。ただかなり貴重なんで、今の俺でも手は出ない。

「お客さん、探索者なんですよ？ ポーションは買つとした方がいいよ？」

「そうだな、それじゃあこのポーションを四つに、ベルトをもらおうかな」

女の子が勧めるポーションは試験管のような物に入っていて、それを腰に付けるためのベルトも一緒に買う。

「毎度あり！ ポーションが四つで四〇〇万、ベルトが五〇〇〇円だよ」

高い。しかしポーションは飲んだり身体にかけたりするだけでケガが治る不思議な薬だからな。

ダンジョン内で手に入れるには薬師くすりしに作ってもらうか、宝箱から見つけるしかない。買える時に買つとくべきだ。

「ギルドカード使える？」

「使えるよ！」

カードを渡して支払いを済ませる。

すると女の子はポーションを割れないように紙で包んで、袋に入れて渡してくれた。

「ありがとう」

「ありがとうございました」

店を出ると丁度いい時間だな。約束の店に向かつて歩いていく。

『居酒屋麦わら猫』に着く。猫の看板のかかった店内を覗くと、洒落しやれた感じがした。中に入るとツネの名前を言う。

「はい、榊原様ですね。こちらです」

店員が二階のボックス席に案内してくれる。そこには既にツネがいた。

「お、やっと来たな！ マー坊は？」

「遅れるかもしれないが、来るってさ」

荷物を横に置き、座って店内を見回す。中々いい雰囲気きふきの居酒屋だな。

「そうか、じゃあ先に始めますか！ 生二つと串盛りね」

仕事帰りのようでワイシャツ姿のツネは、何気ないトーンで口を開いた。

「マー坊は今何してんだ？」

「俺と一緒に、覚醒したらしくて探索者だ」

「くそ、俺だけ覚醒してないのか！ いいなあ」

そんな風に話していると、生が二つ来た。乾杯をして軽く飲む。

「二人が探索者か、そうだ！ お前が売った武器、あれどうやって手に入れたんだ？」

「それは秘密だな。探索者は秘密が多いんだ」

「くっそー、あの武器、刻印したらすぐに海外に行ったぞ」

「そうなのか、あの店で売るんだと思ってたよ」

海外に渡ったのか。よっぽど高く売れるのかな。

「うちの商品にしたかったが、店長がうちのブランドの本部に報告したらしいんだよ」

愚痴が増えてきたので、ビールとつまみを追加で頼む。

いい感じに酔って来たなと思ってたなら、店員が声を掛けてきた。

「お待ちのお客様が到着しました」

「よ！ 久しぶり」

そう言って入って来るのはガタイのいい背の高い男、マー坊だ。

高校時代はラグビーをしていたが、今もやはりがつりしている。

上着を脱ぐとロンTがピッチリしていた。俺は思わず笑う。

「あははは、なんだよその筋肉」

「いいだろ？ 男は筋肉！」

「あはは、脳筋は変わってないな」

ツネの言葉にマー坊は白い歯を見せながら笑った。

そしてツネの隣に座ると、生を頼んで喋りだした。

「腹減った、てか、ここ遠いから！」

「な！ 俺も一時間くらいかかって来たんだぞ？」

俺がそう言うと、ツネは不満そうにする。

「いや、俺は会社勤めだから二人が俺に合わせるよ！」

まあ、探索者は時間が取れるからいいがな。

マー坊の生が来たので再度乾杯して、話題は覚醒についてになる。

「そういえば、ルカの覚醒はなんで分かったんだ？」

ツネの疑問に俺は答える。

「夜中、コンビニの帰りにゴブリンに会ったんだよ」

「は？ 野良のモンスターかよ！ それで？」

「腹をどつかれたからムカついてビールの入った袋でぶん殴ったら、魔石残して消えたんだわ」

「ハハッ、それか？ ステータス確認したら」

「ん、覚醒してた」

ツネは笑っているが、マー坊は驚きと笑いが半々といったところだった。

「野良でもゴブリンだろ？ 覚醒していない奴がつつこんだら普通死ぬぞ？」

「な、後で俺もそう思ったけど、そんな時は酔ってたからな」

二人ともビールを飲み干すので、俺も飲み干しておかわりを頼む。

すると、ツネが今度はマー坊に視線を向ける。

「マー坊はジョブはなんだ？ 闘士とか？」

「ぶー！ 剣士だ」

「へえ、いいな！ 俺の店で武器買ってくれよ」

「あはは、今の剣がダメになったらな」

マー坊は笑いながら答える。するとツネは思い出した様子で身を乗り出した。

「そういえば、ルカがミスリルの武器をうちに売りに来たんだよ！」

「へえ、ルカが？ しかもミスリルかあ、凄いな」

「何が凄いつてステータスアップの付与付きだぞ？」

「マジか！ ルカ！ 俺にも売ってくれ」

マー坊が今度はこつちを見たので、俺は答える。

「ん？ いいけど、剣士というと武器は片手剣？ 大剣？」

「両手持ちの剣だから、大剣だな」

「大剣か、でも高いぞ？」

「どんなもんだ？」

マー坊は俺でなく、専門家のツネに聞く。

「まあ、あのレベルのミスリルソードだとウチじゃあ買値で四〇〇〇万、売値だと六〇〇〇万はす

るな」

「は？」

マー坊と言葉が被る。しかし、俺が驚いたのは多分マー坊とは違う理由だ。

「お前の店、ぼったくりか？」

俺は思わずそう漏らした。だって、買値から二〇〇〇万も高く売ることか？

すると、ツネはこちらを見てくる。

「あ？ これが普通の値段だ！ 安く買って高く売るのは店の常識だ」

「……ま、まあな」

そこは分かるが、二〇〇〇万も安く買われるのはなあ。などと思っていると、ツネは続ける。

「言っとくけど、武器につけられるうちの店の刻印。あれの価値はデカイ。要するにキチンとした

武器だって保証だ。だから高く売れるんだよ」

「んー、まあ、そう言われればそうだが、二〇〇〇万も差が出るのか」

「高級ブランド『forte』だからな」

「いや、お前なんの話してんだ？ ミスリルソードだよな？ 二〇〇〇万あれば釣りが来るぞ？」

すると、これまでぼんやりしていたマー坊が口を開いた。ツネが答える。

「付与が桁違いなんだよ。力、素早さ、防御、知力、幸運が付いているミスリルソードだぞ？」

「……そんなのあるのか？」

ツネがスマホを操作してマー坊に見せる。

「は？ ミスリルの片手剣……力＋15、素早さ＋15、防御＋3、知力＋6、幸運＋6？ あ、ありえねえ」

「だろ？ それを平気で持つて来るルカだ。お前は特殊なジョブなんだろう？」

「まあな、ミスリルソードならもうすぐ手に入るから、マー坊が欲しいなら、んー、四〇〇〇万で売ってやるよ」

「マジか？ くう、もう一声」

「友人価格で三五〇〇万だな」

「買う！ そんなだけ付与がついてるなら買う価値はあるな！」

マー坊がそう言うのと、ツネは笑って俺に視線を向けてくる。

「まあ、ここは聞かなかったことにするけど、うちの店長もミスリルソードは欲しがってたな」

「まあ、そのうちな」

武器の話が一段落したところで、マー坊が笑い話っぽく言ってくる。

「そうだ、話は変わるが、うちのメンバー、中々エグいぞ？」

「どうエグいんだ？ ルカみたいな、特殊なジョブ持ちでもいるのか」

「違う違う。メンバー構成の話だ。俺、魔法使いの十九の女、タンクの四十五のオッサン、斥候の二十五の女、回復術師の二十二の女」

「は？ お前とタンクのオッサン以外、年下の女の子か？」

俺がそう尋ねると、マー坊は困ったように笑う。

「そう、肩身が狭せまくてな」

「どうやってそんなパーティが出来たんだ？」

ツネは唐揚げを食いながらそう聞く。

「ネットだな。パーティ募集したら集まったのがそのメンバーだ」

「へえ、ネットね。レベルは同じくらいなのか？」

俺が尋ねると、マー坊は頷く。

「ほぼ同じかな。今は星3のダンジョンを攻略中だ。ルカもどうだ？ 入るか？」

星3って言ったら結構な難度だし、そもそも俺のランクでは入れない。

「俺はまだ星1ダンジョンにいるんだ」

「は？」

大声でハモるなや！ と思いつつ続ける。

「初心者ダンジョンにいるんだよ、ソロだし安全を重視したいしな」

「おま、それでミスリル武器？ 生産職で自分で作ったってことか？」

マー坊の言葉に俺は頷く。

「まあ、そんなとこだ」

「ソロで星1、それでミスリルなんてありえねえ！　どんなレア職だよ!？」

「これ以上は言わないぞ？」

「クソッ！　レア職なんていいなあ！　ずりいよ」

マー坊にずりいと言われても初心者ダンジョンから先に進んでないし、荷物は重いし、結構疲れるんだぞ？」

「二人が探索者になつてゐるのに俺は固定給か」

ツネがやや寂しそうに呟いたので、俺は本音を言う。

「だけどお前は副店長だろ？　俺は仕事をクビになつてから覚醒に気づいたからな？　どん底から這い上がつてこられたから良かったけど、そうじゃなかったら今頃飲みにもいけなかったんだぞ？」

「クビ？　お前正社員だったろ？」

「しょうがないだろ？　不景気なんだから」

まあ、ダンジョンに潜る探索者には関係ない話だけだな。

「まあ、今は三人とも無事に職があるんだから良かったな」

マー坊がしみじみとそう言う。

「マー坊はいくら稼いでるんだ？　俺はダンジョンドロップだけだと最高一五万くらいだが」

「んー、最高は三〇〇万かな」

「探索者の二人は夢があつていいねえ」

「星3にもなると消耗品も高いから、実入りはそれなりだぞ？」

マー坊はいい感じに酔っているようだな。

時間もあれだし、しょうがないからそろそろ帰ることにしよう。

そんなこんなで割り勘して店を出る。

「ルカ、武器は俺んとこに売りに来いよ？」

とツネが言う。

「分かったよ、そんな時は高く買えよ？」

「ハハッ、善処する」

「ルカ！　俺のミスリルソードも忘れてないからな？」

「おう、手に入ったら連絡する」

こうしてツネとマー坊はタクシーで、俺は電車で帰る。

久しぶりの友人との飲みは楽しいな。

第三章 『合成』

「お気を付けて！　ありがとうございました！」

中古車のディーラーの挨拶に頷いて、車を発進させる。

黒のSUVで魔石エネルギーとガソリンのハイブリッド車。俺の新しい愛車だ。

「ククッ！アーハッハッハッ！」

やっぱり探索者になって良かった！念願の車も手に入ったしな！

とりあえずノーマルで乗って、気が向いたらドレスアップしていいのかな？

ピカピカの車はやはり乗っていて楽しいな。

新宿から足立区まで三十分ほどドライブしながらアパートに帰ると、駐車場に車を駐^とめる。

とりあえず部屋に戻って今ある武器を見る。

ダマスカスソード、鋼鉄の剣、鉄の剣が一本ずつある。あと鉄の剣が一本あればミスリルソードになるな。

あとはミスリルの盾、ミスリルダガーが一つずつあるからこれはツネのところだな。

「あ、そうそう、この前ポーションを買ったんだっ」

四本あるので『合成』してみる。俺のスキルは、アイテムも合成が出来る。

すると、ポーション↓ハイポーション↓エクストラポーションになった。

入っていた試験管も豪華になったな。

しかも付与で『解毒、解呪、幸運+3』までついている。効果は良く分からないが、とんでもないポーションが出来上がったんじゃないか。

エクストラポーションはオークションにも出てない貴重な物らしいので、売るのはやめて保管しておくか。俺の行ってるダンジョンだと、普通のポーションがあれば事足りるしな。

でも今『合成』で使ったから、普通のポーションもどこかで調達しないとな。

◇ ◇ ◇

そして翌日、初級ダンジョンに車で向かう。

準備を整えてダンジョンに入っていく。

すぐに二階層に降りて、三階層を目指しながらゴブリンを斬っていく。

三階層に降りてオークを倒していくと、レベルが上がり、武器やオーク肉もドロップする。ここは最高のダンジョンだな。

ドロップ品がもう持てないくらいになるとダンジョンから出る。そしてオーク肉を買い取ってもらい、武器類を車のトランクに積むと、もう一度三階層まで降りていく。

これを繰り返し四回。自分の中で設定したタイムリミットの十五時になったので、ダンジョンの外に出る。

大体、オーク肉は纏^{まと}めて六〇万円ほど、魔石は一個二〇〇円から三〇〇円だ。

まあチリつもで結構な額になるので、捨てるわけにもいかない。

武器もそれなりに集まったので帰って合成だと思いつつ、ステータスを確認する。

里見瑠夏《サトミルカ》 32歳

レベル27 ジョブ 合成師

スキル 合成 鑑定 加工（NEW）

ユニーク 追加効果

よし、スキルが増えてるし、あと3レベルでソロでの四階層の目安だな。
四階層のモンスターも見てみたいし、この調子でいくか。

初級ダンジョンは五階層までだし、頑張れば今のレベルでも十分、ソロクリアは可能だ。

ちなみにダンジョンの最後の階層にはボスが待っている。星2が二〇階層、星3が五〇階層、星4は一〇〇階層までだ。

星5に至ってはまだ何階層までも分からない。そもそも星5のダンジョンは世界にまだ八つしか見つかってないらしい。

まあ、星5まで挑戦する気はないし、最高レベルの100まで上がれば、『合成師』のスキルは

十分育つだろう。

そもそも今のところ不自由はない。初級ダンジョンでもそれなりに稼げるからな。ドロップ武器を持って歩くのは大変だが、これが金になるんだから美味しい商売だ。

「星5攻略なんてのは他の探索者に任せればいい」

車を発進させ、途中でコンビ二に寄ってビールやつまみ、飯などを買いアパートに戻る。

さて、飲みながら合成でもしていこうかな。

まずはマー坊のミスリルソード。

座椅子に座り、テーブルに武器を置いて合成していく。そして、出来上がった武器を鑑定した。

『ミスリルソード（力+18、素早さ+12、防御+3、知力+3、幸運+6、炎属性）』

「おお！ 属性が付いたのか！ だから炎っぽいデザインなんだな！ 約束なんてせずに売ればもっと金が入るかもな……まあ、約束したからマー坊に売るけど」

属性武器とは、その属性の力が宿った武器だ。たとえば炎属性の剣なら、炎を発したり、剣を高熱にしたりなんてことが出来るらしい。ただかなり貴重だと聞いたことがあるな。

今出来上がったのは、普通のミスリルソードではない。デザインが変わり、刀身が炎のような形をした赤っぽいミスリルソードだ。

他にもミスリルダガー×2、ミスリルスピア、ミスリルの弓、ミスリルの片手剣、ミスリルの大剣が出来た。

しかも、この中でミスリルスピア、片手剣、大剣も属性武器になったから高く売れるぞ！ビールを飲みながら笑いが止まらない。とはいえ、不満がゼロというわけではない。

「……武器に付与される効果を自分で選べたら、もっと稼げるんだが」

なんでも『鍛冶士』が持つスキル『付与』ならいろんな能力が狙って付与出来るらしい。だが俺のは合成してみるまで、どんな付与がされるかは分からないのだ。

まあ、ないものねだりをして仕方がない。とにかく明日は、これ売りにマー坊とツネのところに行こうかな。

「ハハッ！ 初級ダンジョンでこれだけ稼ぐ奴は他にいないだろうな」

一人で喋りながら俺は笑った。

その後、この狭い部屋から引越すため、スマホで物件を探す。

希望は初心者ダンジョンが近くにある物件だ。あと新宿に近い場所がいいな。また三人で飲むだろうしな。

そんなふうに未来を夢見ながら、気ままにビールを飲むのだった。

◇ ◇ ◇

「さて、出発！」

翌日、お気に入りの音楽をかけながら車で新宿の『fortie』に向かう。

事前にツネには連絡してある。やはり車は便利だな。

駐車場に車を駐めるとツネが外に出てくる。

「いらつしやいませ、つてか、車買ったんだな」

「おう、部屋も今、新宿の近くで探してる」

「へえ、いい車じゃないか！ さすが探索者！」

車をぐるりと見ているツネ。それに対して俺は言う。

「今日の武器はかなり数があるし、驚くと思うぞ。ちゃんと勉強してくれよ？」

「ああ、店長は社長から表彰されて、ル力を逃がすなって言われたらしいから高めで買ってくれるぜ？」

「それはいいことを聞いたな」

笑いながら車から荷物を二人で下ろして、店へと入る。すると店長が迎えてくれた。

「いらつしやいませ、里見様」